

[優秀賞]

青柳 凜さん（秋田市）レビュー

書評対象図書

チョン・ソンラン 著／カン・バンファ 訳／坂内 拓 画

『千個の青』（早川書房）

ゆっくり走る練習

私たちは言葉を知りすぎている。知らなければいいものを、自分が置かれた状況にぴったりの言葉を持ち合わせているから、悩むし、愚痴るし、言い訳してしまう。ならば、もし言葉を千個しか知らなければ、私たちに見える世界はもっと美しくなるのだろうか。

競馬が過熱した近未来の韓国では、馬をカーレース並みのスピードで走らせるべく、軽量化されたロボットが騎手となっていた。コリーもそのうちの1台だが、開発中にチップが混入し、千個の言葉とそれを束ねる思考力を手に入れた。廃棄寸前の身でありながら、コリーは人間を—特に彼らの感情を—手持ちの語彙でひたむきに理解しようとする。

感情の理解という意味では、コリーの置かれた環境は最適だったかもしれない。コリーの周りはみな、どこかしら傷ついているからだ。相棒の名馬・トウディは、過労が祟ってケガをし、今は安樂死を待つのみ。彼らを救おうと奔走するヨンジェは、自分の力が及ばない問題に幾度もさらされるうち、知つてか知らでか心に蓋をするようになった。姉のウネは幼いころから車いす生活だが、彼女からすれば、自身を不自由にしているのは実は社会の方だった。二人の母・ボギョンが、かつては俳優だったにもかかわらず、今は一人で飲食店を切り盛りしているのも、何か事情がありそうだ。そんな彼らの一筋縄ではいかない傷を、奇しくもコリーが癒していく。

世界は、コリーが知っている単語だけで表しきれるほど単純ではない。しかし、だからこそ、コリーの言葉には一切混じりけがない。血の通った人間は、ときに優しい?をつき、それが裏目に出ることも多いが、コリーの目標はただ一つ。真理を捉えることだ。そんなコリーの澄んだ言葉は、私たちの傷口に、まるで軟膏のようにすっと浸透していくてくれる。

トウディのように、今まで痛みをこらえて全力疾走してきたけれど、もういつ足が止まってもおかしくないというあなたへ。本書からこの言葉を贈ろう。

「私たちはみんな、ゆっくり走る練習が必要だ。」